



GOOD NEWS と きの こ え

War Cry

2月号

福音版
2026
February
No.2901

二〇二六年 二月一日発行

明治二十八年創刊

福音版・毎月一日発行

広報版・奇数月十五日発行

バレンタイン・デーは「愛の日」

ウエンデイ・モーリス

日本に来て、私はバレンタイン・デーに心を惹かれるようになりました。毎年二月十四日に夫にチョココレートを贈り、ホワイトデーに何が返ってくるのか楽しみに待ちます。世界には他にどのような「愛の日」の守り方があるのでしょうか？

調べてみると、いろいろな習慣があることがわかりました。
ナショナル・チョココレートを贈り、ホワイトデーにロマンチックなディナーを楽しむ(フランス)
キスと引き換えにキャンディーを贈り合う(アルゼ

ンチン)
女性が想いを寄せる人の名前を洋服のそでに留める(南アフリカ)
バーチ・ベルジーナというチョココレートを交換する(イタリア)
仲を裂かれて星になった恋人たちの伝説に由来する七夕節を祝う(中国)
木彫のスプーンを贈る(ウエールズ)
古い詩にのっとつて木の皮でキスを交わす(チェコ)
カードとバラを贈る(アメリカ)



歴史をひもとくと、五世紀に、教皇ゲラシウス一世が、古代ローマのルペルカリア祭に代えて、恋人たちの守護聖人である聖ヴァレンティヌス(バレンタイン)の祝日を定めました。以来「愛の日」は世界に広まり、それぞれの文化に合った形で受け継がれてきました。

聖書には、友人同士、母と娘、父と息子、夫と妻の「愛の物語」が描かれ、互いに愛し合う関係性の創始者が、神ご自身であることが示されています。私が特に心を動かされるのは、ルカによる福音書一〇章二五節から三七節の「善いサマリヤ人」のたとえです。

その物語では、あるユダヤ人が旅の途中で強盗に襲われ、半死半生で放置されます。そこに宗教的なエリートが通りかかりますが、死体に触れて汚れることを恐れて、助けようとしません。神殿の祭司も通りますが、仕事を優先して立ち去ります。立ち止まったのは誰も予期しない人物でした。サマリヤ人です。ユダヤ人とサマリヤ人の間には長年の敵意が存在し、ユダヤ人から憎まれていたサマリヤ人が、苦しむユダヤ人を助けたのです。そして、サマリヤ人は憐れみの思いに動かされて、ユダヤ人を手当てし、自分のろばに乗せて宿屋へ連れて行き、看病し、宿賃を払い、追加の費用が必要な後日さらに支払うことを約束した、と記されています。

これは衝撃的な話ですが、同時に神の愛を映し出しています。神は、すべての人を分け隔てなく愛しておられます。これが愛の姿なのです。隣人を愛することは、神に奉仕することであり、隣人に奉仕することが、神に奉仕することになるのです。家族や友人に奉仕することは容易でしょう。しかし、見返りを期待できない人、見ず知らずの人、「ふさわしくない」と感じてしまう相手に対しても、変わらずに愛を示すことができるでしょうか？

今年の二月十四日、身近な人への愛を思うとき、どうか「バレンタインをもたないかもしれない人々」にも心を向けてください。そのとき、特別な喜びを経験することでしょう。神の愛によって、世界がより良い場所に変えられていくに違いありません。ハッピー・バレンタインデー。

(救世軍士官(伝道者))

岩の上に建てる

—祖父の回心から保育と礼拝へ



青木 誠 さん (救世軍渋谷小隊所属)

日本の救世軍の130年の歴史には、多くの信仰者の足跡が刻まれています。青木誠さんの祖父、杉山徳市さんもその一人です。大正時代の終わりに回心しキリストを信じた祖父をルーツに、イエス・キリストを土台とする信仰生活に導かれ、今、キリスト教保育の現場に身をおく青木さんの証言をお聞きました。

野戦から始まった救い

私の母方の祖父・杉山徳市の回心は、弟の杉山春市(後に士官(伝道者)、特務曹長(信徒伝道者))が静岡市・七間町という繁華街で出会った救世軍の野戦(路傍伝道)に端を発します。春市は静岡小隊(教会にあたる)に導かれ、これこそ生きる希望を与えてくれると、罪を悔い改め、イエス・キリストの救いに与りました。

一方、祖父徳市は腕の立つヤスリの目立て職人で、仕事は一生懸命でしたが遊びは派手でした。当時、兄の家に同居していた春市は、ぜひ兄にも救いをと願い、静岡小隊の集会へ連れて行きました。徳市は福音のメッセージに打たれて回心し、その帰途、電車が隣の清水の終点に着く直前、川の鉄橋に差しかかった時、ふところに入れてあった煙草の道具を川に投げ捨て、生まれ変わる決心をしました。自宅に着くと遊び仲間にも紙を書き「キリスト教の救世軍の信者になったから、今までの付き合いはやめ」と伝えました。一九二二年のことでした。

その後の生活は誰もがびっくりする百八十度の大転換で、早速、兄弟で野戦を始め、自宅を開放して伝道集会や子どもの集会をおこないました。救世軍歌(賛美歌を口ずさみながらヤスリの目立ての仕事に励み、どこかで火事が起きると、慰問品と『ときのかえ』やトラクトを携えて駆けつけました。このように、信仰が生活の実践となって現れる生き方は、家族や地域の多くの人のみならず、孫の私にも大きな影響を与えました。

戦後の清水に芽生えた「のぞみ」

終戦後は多くの子どもたちが放つたらかしにされていました。祖父は「今こそ子どもたちにキリストの救いが必要だ」と感じ、仕事を早く済ませて、夕暮れの街角に自転車の荷台に聖書の紙芝居を積んで出かけた。子どもたちに福音を語りました。

さらに、ヤスリ工場の裏で無認可のキリスト教保育「のぞみ保育園」を始めました。祖父の二女である母は保育士として支え、やがて同じ清水小隊の兵士(信徒)であった父と結婚しまし

た。若い夫婦家族は保育園の一角で暮らし、日曜には保育室が清水小隊の礼拝堂へと姿を変えました。戦災で清水小隊会館が焼失していたためです。土曜に長椅子を並べて礼拝の準備をし、日曜の夜には野戦から戻るラップと太鼓の音が近づいてくる——その音色を子守歌に、私は眠りにつきました。「保育」と「礼拝」が一つ屋根の下で響き合う日々でした。



幼い頃、バイオリンを弾く私

保育園で育ち、賛美の音楽に囲まれて

私は戦後間もない一九四九年、清水で生まれ、のぞみ保育園が生活の場でした。平日は子どもたちの笑い声に囲まれ、日曜は祈りと賛美に包まれるという環境が、自然と私の信仰の骨格を形づくっていきました。

音楽は私のもう一つの言語でした。幼い頃からバイオリンで音程に厳しい耳を養い、高校では静岡県独特のリード合奏の「ハーモニ



高校時代、ハーモニカバンドで指揮

若き日の揺れ動きと、結婚による再決心

保育園と救世軍の小隊を兼ねた場所の中で生まれ育った私にとって、礼拝に出席することは当たり前のことでした。しかし、清水を

カバンド」で指揮を任せられました。合奏のどこが揺らぎ、どう立て直すかを身体で覚えた経験は、後年、救世軍のブラスバンドで「聴く・止める・整える」という奉仕を担う感覚の土台になりました。救世軍のチューンブック(伴奏譜)の伴奏の和音が『讚美歌』よりもしゃれていると感動したのもその高校時代でした。

*福音：キリストを信じるにより誰でも救われるという「よい知らせ」のこと。



清水の街頭で社会鍋に立つ



渋谷バンドと唱歌隊が清水に遠征。2007年(筆者は最前列右から4番目)

離れて仙台の大学に進んでからは、しばらくは仙台小隊に顔を出しつつも、学業と自由の気安さに押されて礼拝から遠ざかり、自由を楽しましました。心配した祖父徳市や大叔父春市は、下宿まで訪ねて来て励ましてくれましたが、私の足取りは定まりませんでした。

その後、就職し東京近郊の寮に入りました。その頃は、今の生活は自由ではあるが、何か心棒が欠けていると感じるようになっていきました。

転機は結婚でした。後に妻となる玲子はミッシヨンの学校で学んだ後、キリスト教保育に携わっていましたが、「クリスチャンではない私が神様の御言葉(みことば)を子どもたちに語ってよいのだろうか」と葛藤していまし

た。時がきて私たちは結婚するにあたり、新しい家庭は砂ではなく岩の上に建てたい。そう二人で確信して、結婚式の司式者である救世軍士官に、東京でどの小隊に所属したらよいか相談すると、「渋谷小隊に行きなさい」と即答をいただきました。一九七七年三月、清水小隊で挙式。すぐに私たちは渋谷小隊に通い始め、恵の座(ぎのざ)にひざまずいて「イエス・キリストという岩の上に家庭を築かせてください」と祈り、私は信仰の再決意をしました。間もなく妻も救世軍の兵士となりました。大変嬉しかったです。

私は電機メーカーでシステムエンジニアとして働き、浄水場・下水処理場や自動車工場などのリアルタイム制御システムの構築に携わりました。システム設計、プログラミング、現地調整と徹夜続きの月もありましたが、原因を突き止めて直す粘り強さは、信仰生活の「祈り」に通じるものがあったと思います。多忙で小隊に行けない時もありましたが、

「行ける時は必ず行く」を合言葉に、礼拝への足を絶やさないよう努めました。清水への帰還―理事長として、息子として

働き盛りの日々

「保育」と「礼拝」が響き合う日々、再び

定年退職後は、父から受け継いだ保育園の理事長職をしつつ、礼拝と奉仕に時間を献げられるようになり、二〇一一年には渋谷小隊バンドの楽長の任命をいただきました。毎週日曜には自宅のあった神奈川県相模原を玲子と早朝に出発し、小隊での礼拝準備に当たっていました。新型コロナウイルスの流行を機に清水へ戻りました。保育園の理事長として感染クラスターが万一発生した場合に即応が求められ、また父の召天後一人になった母の介護もあつたからです。清水に転居して一週間後に母は天に召されました。きつと安心したのだろうと思います。母は長年、小隊の会計を務めていました。認知症が進んでからも、祈りの時だけは驚くほど明晰な言葉で、時宜(とき)にかなった祈りを献げていました。祈りは人を最も深いところで支える―母は最期までそれを教えてくれ

岩の上に建てる

私の愛唱聖句は、信仰の再決心の折に心に刻まれたマタイによる福音書七章二四―二五節です。「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行く者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲つても、倒れなかった岩を土台としていたからである。」

*恵の座:救世軍の会館前方にある祈りの場所。 *献児式:子どもが生まれた時、その命を感謝し、親が、神を愛し従う生き方の模範となるよう約束する式。

創立者 ウィリアム・ブース 大将 リンドン・バッキンガム（万国本営 英国ロンドン） 日本司令官 スティーブ・モーリス（救世軍本営 東京都千代田区）



世界をみつめて

〈日本〉社会鍋へのご協力をありがとうございました

昨年12月、各地で救世軍社会鍋をおこない、多くのご協力をいただきました。寄せられたご献金は、年末年始にかけて作業所や施設への支援のため、また年間を通じて、災害時の緊急支援活動、街頭生活者支援、子ども食堂の実施などのために用いられます。皆様の温かいご協力に感謝申し上げます。



大阪・阿倍野で

〈香港〉高層マンション火災の被災者への支援活動

昨年11月26日に香港北部の大埔区にある高層マンション宏福苑で火災が発生し、150人以上の死者が出る大惨事となりました。火災発生当日、現地の救世軍では、宏福苑付近にある救世軍の2つの施設を緊急に開放し、被災した高齢者と家族を受け入れました。ソーシャルワーカーと心理学の専門家が人々の対応にあたり、救世軍の士官（伝道者）10人が牧会的ケアを提供するために派遣されました。夜には、暖かい衣類や支援物資が被災者に届けられました。翌朝、被害の大きさが明らかになると、救世軍は政府と協力し、香港全域で200世帯の住宅を確保するとともに、寝具、衣類、その他の必需品の配布をおこないました。

12月10日時点で、救世軍を通して衣類と日用品2万点、ベッド2千台以上が届けられました。また、目に見えるニーズだけでなく、被災した人々の心の安定を取り戻すことにも力を尽くし、救世軍が運営する学校の生徒たちは、支援品セットを準備し、励ましのメッセージを添えました。物質的なニーズが満たされても、被災者の喪失感はずぐに癒えるものではありません。今後も、政府機関や他の団体と協力して支援を続けていく予定です。



〈ルワンダ〉開設30周年記念集会

昨年11月末、救世軍国際本部の参謀総長エドワード・ヒル中将夫妻は、ルワンダの救世軍を訪問し、30周年記念の集会を導きました。11月30日（日）、キガリでおこなわれた礼拝には800人以上が集まり、78人が新たに救世軍兵士（信徒）となりました。滞在中、夫妻はルブイエで救世軍が運営する学校を訪問しました。160人以上の生徒が学んでおり、キリスト教的価値観に基づく教育が進められています。また、キガリ虐殺記念館では、1994年のジェノサイド犠牲者25万人以上の追悼の祈りを献げ、救世軍が正義と平和、すべての人の尊厳の尊重に専心することを表明しました。過去30年間、癒しと和解の道を行ってきたルワンダで、救世軍は今後もコミュニティ支援と神の愛の伝達に力を尽くすことを誓っています。



救世軍とは？ What is the Salvation Army?



救世軍は、世界134の国で活動するプロテスタントのキリスト教会で、国際本部は英国ロンドンにあります。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウィリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で困難な生活状況にある人々に助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

初期は「キリスト教伝道会」という名称でしたが、1878年、ブースはじめ指導者たちは、「我々は、キリストの福音を常に宣べ伝える軍隊『ザ・サルベーション・アーミー』である」というインスピレーションを受け、日本語で「救世軍」と訳されるこの名称が生まれました。それに伴い、聖書のテモテへの手紙二章三節に「キリスト・イエスの立派な兵士として……」とあるように、社会悪と闘い、人々の魂を救うための迅速な行動に最も適したものとして、軍隊流の組織をとるようになりました。日本では、1895（明治28）年に英国から士官（伝道者）が派遣されて活動が始まり、昨年、130周年を迎えました。

☆『キッズ・ゴスペル』コーナー☆
(子ども向け紙面)

左のQRコードから、今月の『キッズ・ゴスペル』を閲覧できます！ 聖書のお話も動画で見られます。ぜひ、ご覧ください！



救世軍公報 ときのごえ
発行日 福音版 / 毎月1日、広報版 / 奇数月15日
定 価 福音版 / 1部40円、広報版 / 1部100円
(税込) クリスマス特集号 (12月1日号) / 1部100円
振 替 00180-5-4400
発行兼 救世軍
印刷人 代表者 スティーブ・モーリス
編集人 山谷 真
発行所 救世軍本営 <https://www.salvationarmy.or.jp>
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話 03-3237-0881(代表)
Mail jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所 有限会社コーチ印刷



聖書は新共同訳を使用しています ©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会 救世軍は、旧統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の中から該当する項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営(左記)、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
・私の近くの救世軍を紹介してください。 ・キリスト教についてもっと知りたいです。
・『ときのごえ』の購読を申し込みます。 ・相談を希望します。